

Views from Orienteering

オリエンテーリングを通して社会を見る

村越 真

長い間連載してきた村越真のオリエンテーリング日誌:fast life, slow life に代わり、今号からは、オリエンテーリングと社会との接点を掘り下げるエッセイを連載します。

View1: 森が変わる

富士山南麓でオリエンテーリング活動をしていると、1990年代半ばから森が変わり始めたことに気づく。一つは富士一合目のトレインを代表として、9月の台風により大きな風倒木の被害が出た森林の復元に際して、ブナなど自然林に近い森づくりが積極的に行われるようになったことだ。

もう一つは、間伐が積極的に行われるようになったことだ。それまでの富士の森といえば、いわゆる「スーパーA」と呼ばれる下草の全くはえない、通行可能度抜群の林がもてはやされていた。

しかし、スーパーAは林業的に見れば、林床に全く陽が入らない不健全な状態なのだ。林床に草が生えなければ、雨水によって土壌が簡単に浸食する。それによってできた季節的水路は富士のトレインの随所に見ることができ、それが放置されていたのは、間伐が経済的に割に合わないからなのだ。

ところが1990年代後半から、この地域でかなり計画的に間伐が行われるようになった。1989年に作られた全日本の地図「富士愛鷹」とその後静大が同じ場所で作った「雨降り山物語」を比較すると、その5年間に縦横無尽に林道が作られたことに気づくだろう。いずれも間伐作業のために作られたものである。同様に現在村山口でも林道作成と間伐は進行中である。間伐によって林床に日が入ると下草が生える。今回の全日本は「富士愛鷹」のリメイクであるが、それを見れば、その効果は一目瞭然である。村山口の調査に際して、なぜこんな変化が起こったのかと思ってウェブで探していたら、富士地区では高密度の林道と施業方法によって経済的にも引き合う間伐方法が採用されたからだ。

最近富士山一周トレランの準備のために、地元の関係者とのおつきあいが増えた。県の助成金の時にもアドバイザーとしてお世話になった地元の渡辺さん(東大の農学部林学の名誉教授で

もある)が講師となった富士宮市役所で開かれた「富士山自然の森づくり」の講演会に出かけた。

彼の講演を聴いて、それまで自分の中で断片的だった事実が、ようやく一つにまとまった。上に示したような富士山麓の森の変化は、全て彼の「仕業」だったのだ。元々針葉樹林は、富士山麓にとっては不自然な状態である。それを元に戻そうというのが「自然林復元」作業だ。そこではブナを中心として多様な植生をパッチのように風倒木によって荒地地になった場所に植える。人工的に手を加えることで素早く自然状態に戻そうという発想で、富士山1-2合目あたりの針葉樹の一部は自然林に帰りつつある。渡辺さんのアイデアである。

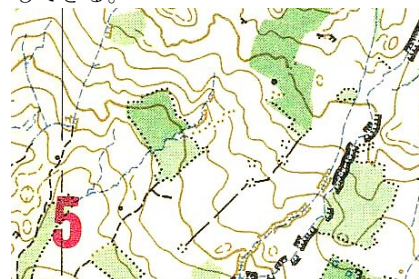
一方不健全な人工林を健全化するためには、間伐事業の収益化が必要である。収益があるからこそ、間伐をしようという気になるからだ。渡辺さんはそのための方法論を研究の積み重ねによってまとめ、実行した。たとえば林道の勾配は6%以内に押さえる。また、地山の流水と路面の流水が連続すると土壌の流失が起こる。これを防ぐために、林道の山側にL字の側溝を作る。それによって流水は地表面から速やかに地面にしみこみ、土壌の流出も最小限に押さえられる。林道に普通まく砂利もまかない。ところどころに大きな透水穴を掘り、そこから積極的に雨水を地下に入れる。こうすることで林道の維持費が90%も削減できる。元々間伐事業の経費の大部分は林道とその維持に使われていたので、これによって、1haあたり10万円の利益を山主に還元することが可能になるという。全日本の地図調査をしながら、どうしてこんなに曲がりくねった林道が造られているのだろう、なぜあちこちに2m深の穴があるのだろうと不思議に思いつつ、地図に記載していったのだが、全ては渡辺さんの仕業だったのである。

彼は退職金どころか奥さんの貯金までつぎ込み、施業用の重機を開発した。彼の試算によれば、この重機が2000台とそれに見合うオペレーターが居れば、日本全国で外材に対抗しうるコストで間伐が可能になる。この間伐を8-10年周期で繰り返し、最終的には1haあたり100本の木を残す。150年後には1本10万円、1haあたり1000万円の価値

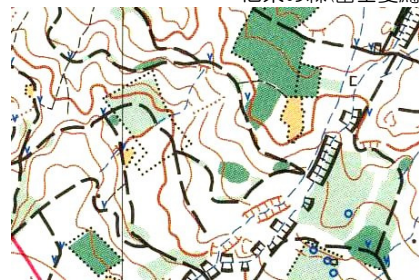
のある材の形成が可能になるという。

70歳を越えた渡辺さんはもちろん、今生きている誰もが、その時を目にすることはできない。精緻な計算と時間的なスケールのアンバランスに目眩がする。

こうした施業によって、富士愛鷹の森は、見事なまでに一定の傾斜の林道網で覆われた反面、私たちオリエンティアにとっては、やっかいなやぶに覆われることになった。これまでのような、「とにかくまっすぐ進んでなんか見てコントロールに近づく」という大雑把なオリエンテーリングは、渡辺さんの森では通用しない。オリエンティアにとって、新たなチャレンジが富士の森に用意されつつあると考えることもできる。



旧来の森(富士愛鷹)



間伐後の森(雨降り山物語) 変わる富士の森

富士山一周トレランニングのために、もう一つの富士山との関わりをした。ごみ拾いである。オリエンティアメールでも呼びかけたところ、4人のオリエンティアが参加してくれた。もともとトレランイベントのためのゴミ拾いであったが、4月上旬に行ったルートは子どもの国から白糸付近までで、そのほぼ全てが現在あるいは過去にオリエンテーリング活動が行われた場所である。粗大ゴミの不法投棄についてはだいぶよくなったとは言え、今でも林の中を走っていると、林道の終わりにゴミが集積しているのを見つける。トレランイベントでも、地元の貴重な森を使わせてもらうのだから、ごみ拾

いをしようということになり、朝霧在住の三好さんが音頭をとって始めたことだ。

この時のゴミ拾い予定区間は約20kmで、3班に分かれたが、結局その1/2程度しか終わることができなかった。拾えたゴミは各自治体でよく使われるゴミ袋で約79袋、その他に不法投棄の粗大ゴミが相当量あった。特に人の入る林道周辺がひどかった。トレランルートに沿って線行的に行っただけでこの始末だから、林道だけでも網状に収集すれば、その数倍はゴミが見つかるだろう。



諦めを知らない不屈のごみ拾い野郎(三好さん命名)によるゴミ拾い



その成果である79袋のゴミ

View2:

こうも使えるアウトドアスキル

山岳雑誌の取材を終えて山から下り、電車を待っていた時、東京の本社と電話をしていた編集者が「すごい揺れてる!大変な騒ぎだ!」と叫んでいる。その数秒後、私たちの下の地面も船の揺れのようにゆっくりと、しかし大きく揺れ始めた。東日本大震災であった。首都圏の鉄道は全て止まっていた。幹線道路を通ると、都心から郊外に向けて多数の帰宅者が歩いていた。一方ラジオでは「安易に帰宅しないでください。暗くなって道に迷うこともあります。途中で体調が悪くなることもあります」と何度も繰り返していた。オリエンテーリングとトレランやっていたら、全くノー・プロブレムである。

新宿まで着いた方がいいが、全ての鉄道は動いておらず、ホテルもすでに満室で、僕は帰宅困難者となった。ラジオで新宿高校や新宿区役所が帰宅困難

者支援所になっているのを知っていたので、新宿高校に向かった。都庁職員か高校の職員なのかかわからないが、マクドナルドばりの笑顔で「お疲れ様」と迎えてくれた。教室や体育館が開放されているのに加えて、適宜交通の回復状況なども掲示されていた。毛布も乾パンもでてきた。支援所の運営はシステマティックで整然としており、それだけで安心した気分になった。都は、ある時期震災時の帰宅困難の影響の大きさに気づき、大規模な訓練を行ったと記憶しているが、そのような訓練とリスクマネージメントが生きた結果だ。

この日の取材はハイキング的なものだったので、トレランや登山時に必ず持つセルフレスキューバックを持っていた。中には軽量のサバイバルシート、28gながら、ヘッドライトとして歩くこともできるeライト、パワーバーと、絆創膏とテーピングのテープが入っていた。すでに真冬ではなかったのに、これだけのものがあれば、たとえ停電になろうが、支援所に入れなからうが、なんとか過ごすことができるだろうという安心感はあった。行動にオプションがあれば冷静になれるものだ。

リスクマネージメントスキルと心構えは、オリエンテーリングのナビゲーションや他のアウトドアスポーツに取り組むことで身についたと思う。ちよくちよく利用する朝霧野外活動センターが、計画停電の影響エリアのため、活動をキャンセルする団体が多いと聞く。野外活動の原点に戻って、足りないものをどう補うかを体験的に考えるよいチャンスだと思うのだが、もったいない。

今、アウトドア界は「そのスキルを被災地救援に生かせるはず」と考え、それを実行している。オリエンテーリング仲間の田中正人氏を含めた水上のアウトドアガイドたちもその一団だし、辰野勇氏率いるモンベルもまた被災地救援を行っている。私たちオリエンティアには何ができるのだろうか?地図を操るスキルはどう生かすことができるのだろうか。

大学の授業のため大量のアウトドア用品を持ち、それが確実に被災地で役立つにもかかわらず届ける手段を持たないため提供することができないという事態に悶々とした日々を送っていたころ、「筋トレの伝道師」山本ケイイチさんから電話があった。仲間と被災地支援に出ているのだが、捜索や配布活動などあまりに広範囲で効率的にできない。地図が必要じゃないかという話で、どうしたら地形図が手に入るでし

ょうか?という相談だった。日本地図センターの通販のページでは1:25000地形図が購入できるが、電子版を購入することもできる。これなら、十分な通信環境になれば、その場で地図が手に入る。Png画像だから、きちんとした縮尺で印刷するのは手間がかかるが、だいたい1:50000くらいに印刷することは難しくない。そんな情報を伝えると、翌日「印刷できました!それをもって活動に入ります」というメールがあった。遊びにしか使ったことのない地図の知識がほんの少しだけ人の役に立った。

やはりボランティア活動で現地に入ったJOA理事の上田氏によれば、地図を使うスキルは被災地でも役立つという。ボランティアで入って来る人は当然よそ者だから、地理に疎い。そこで彼らが働く避難所に地図を貼りだし、それにランドマークなどを書き出してやる。それが救援活動に役立つ。誰もが当たり前のようにそんなスキルを持つ社会は、災害に対しても頑強な社会になるかもしれない。



支援所でサバイバルシートを使って寝る



地震後は町中でも遠出をする時には必ず持つようになったエマージェンシーキット。右上はラテックスの手袋、右中央:テーピング、右下:絆創膏、中央:エマージェンシーシート、光っているのはヘッドライト(たったの28g)、その下がナイフ、左がパワーバー(村越真)